

# 米代川流域の縄文文化

～縄文集落の変遷とストーンサークルの出現～



深渡遺跡の小環状配石



伊勢堂岱遺跡の環状列石A

会期：平成29年6月3日(土)～9月10日(日)

会場：秋田県埋蔵文化財センター特別展示室

杉沢台遺跡の遠景



## はじめに

秋田県埋蔵文化財センターでは、今年度「米代川流域の考古学」として2期に分けて企画展を開催します。第1期は「米代川流域の縄文文化」と題し、米代川流域及びその周辺地域における縄文時代前期後半から後期前半の遺跡を紹介します。この地域においては、前期後半に集落形成が顕著となります。その後、集落は多様に変遷し、後期前半には米代川中流から上流域に大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡の例に代表される巨大なストーンサークル(環状列石)が出現します。こうした変遷の社会的な背景やその意味について、当センターの発掘調査成果を中心とした展示を通じて考えてみたいと思います。

## 大規模集落の出現 ～縄文前期後半～

米代川流域では、縄文時代早期中頃(約8,500年前)には半地下式の<sup>たてあなじゆうきょ</sup>竪穴住居が出現しています。しかし、同時には1～2軒程度の住居しかなかったようで、継続期間も短く、多くの人々が集まって生活する「集落」の一般的なイメージとは少し異なります。多数の住居が集中し、明らかに集落と呼べる遺跡が確認されるのは、約5,500年前の縄文時代前期後半のことです。ここでは、代表例として日本海沿岸部米代川下流域の能代市<sup>すざきさわだい</sup>杉沢台遺跡と内陸部米代川中流域の大館市池内遺跡を取り上げて、その特徴を紹介します。

## 国内最大級の住居が見つかった杉沢台遺跡

杉沢台遺跡は米代川右岸の標高35m前後の台地上にあります(8頁地図1)。昭和55年に4,600㎡余りが発掘調査され、縄文時代では国内最大級の竪穴住居跡を始めとした44軒もの竪穴住居跡、100基以上の貯蔵穴などが発見されました。縄文時代前期後半の集落の様子を示す貴重な遺跡であることから、国の史跡に指定されています。



◀杉沢台遺跡は写真の周囲を含めた30,000㎡以上に広がっています。隅が丸い横長の長方形や楕円形に見えるものは竪穴住居跡、写真上側(北東側)の斜面に密集する小さな円形のものにはドングリなどの食料を保存するための貯蔵穴です。集落には当初中小の住居数軒があり、その後大型の住居が出現し、中小の住居と併存するようになります。



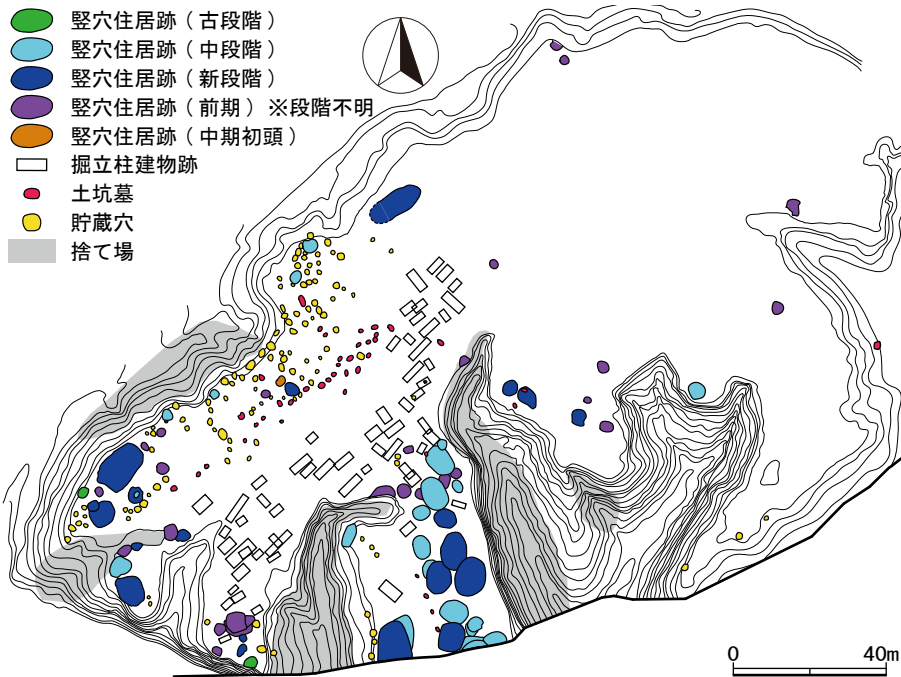
▲写真の右側は長さ約31m、幅約9mの国内最大級の大型竪穴住居跡、左上は長さ約16mの大型竪穴住居跡です。間には2軒より古い時期の円形平面の小型の竪穴住居跡があります。大型竪穴住居跡はどちらも床面中央が一段深くなり、長軸線上には複数の炉が並ぶ特徴があります。具体的な使われ方は不明ですが、多数の人達が利用する集落の中心的な施設だったのでしょう。



▲出土した縄文土器。筒形の特徴的な形から円筒土器と呼ばれます。表面に煤、内面に焦げが付くなど煮炊きに使われた痕跡を残すものもあります。左：高さ40cm。右：高さ36cm。

## 集落全体の内容が明らかになった池内遺跡

池内遺跡は米代川右岸の標高65m前後の台地上にあります(8頁地図6)。平成4年から平成7年にかけて約28,000㎡が発掘調査され、縄文時代前期後半の<sup>ほったてはしらたてもの</sup>竪穴住居跡78軒、掘立柱建物跡63棟、土坑墓45基、貯蔵穴171基のほか、大量の縄文土器や石器、漆器を始めとした木製品や種子類、さらに獣骨、魚骨なども発見されました。集落の大半が調査され、当時の大規模集落の実態を知ることができる重要な遺跡です。



▲長さ約13m、幅約8mの大型竪穴住居跡。床は平坦で、中央に1か所だけ炉があります。中小の竪穴住居跡群からは少し離れ、貯蔵穴群に隣接しています。通常の住居とは異なる役割があったのでしょうか。



▲長さ約6m、幅約4.5mの中型の竪穴住居跡。中央に1か所炉があります。何回か建て替えられています。



▲土坑墓に副葬されていた円筒土器。左は完全な形で、右は大きな破片で収められています。左：高さ14cm。

▲池内遺跡の遺構配置図。池内遺跡の前期後半の集落は、大きくは古・中・新の3段階(3時期)に分けることができます。古段階の住居は崖際の2か所で各1軒見つかっています。おそらく住居はもっと存在していて、その後の住居建設などによって削られてしまったようです。中段階以降は住居数が増加し、新段階には長さが10mを越える大型住居も出現します。遅くとも中段階には墓(土坑墓)が集中する墓地が成立し、新段階まで続きます。墓には土器や石器などを副葬するものもあります。住居は沢や崖の縁に沿うように作られ、墓や掘立柱建物は台地の中央に並びます。貯蔵穴が北側の崖際に集中し、沢や崖には各段階を通じて大量の土器や石器が捨てられた捨て場があります。どうやら各施設の場所が基本的に決まっていたようです。新段階より後の中期初頭の住居は1軒しか見つからず、この時期の直後には集落は断絶してしまいます。



◀土器や石器が副葬された土坑墓。土坑(穴)は長径が約1.3m、深さが約0.5mです。大人1人が体を曲げた状態で埋葬されたのでしょうか。

## 杉沢台集落と池内集落の共通性と違い

杉沢台と池内の両集落は、日本海沿岸部と内陸部に縄文前期後半のほぼ同期間併存していました。ともに良く似た縄文土器、「円筒土器」を使用しています。円筒土器が見つかる遺跡では、ほかの道具にも似たものが多いことなどから、円筒土器を使用した人達が共通してもつ文化として「円筒土器文化」が存在したとする考えがあります。実際、両集落では円筒土器以外にも、楕円形平面の住居や貯蔵穴が台地の縁に沿ってまとまって立地するなど共通点が少なくありません。一方、池内集落では墓地が出現し、掘立柱建物が作られているのに対し、杉沢台集落ではこれらは認められません。また、大型竪穴住居を見ると、杉沢台では床に多数の炉が並ぶのに対し、池内では1基の炉しかなく、住居の形も少し異なります。実は池内集落の墓地の出現などの特徴は現在の北海道南部から青森県地方と、杉沢台集落の大型住居の特徴は現在の岩手県内陸部など、より南方の地域とそれぞれ共通するものです。両集落はよく似た道具を使い、米代川を通じた沿岸部と内陸部の相互交流も予想される一方で、池内では北方との、杉沢台では南方との交流も想像されるのです。交流の実態は必ずしも明確ではありませんが、墓地の有無に注目すると、それぞれの埋葬に関わるマツリには違いがあったものと推定できます。おそらく他界観や祖先についての意識なども少し異なっていたのでしょうか。



## 日本海沿岸部集落の盛衰 ～縄文中期～

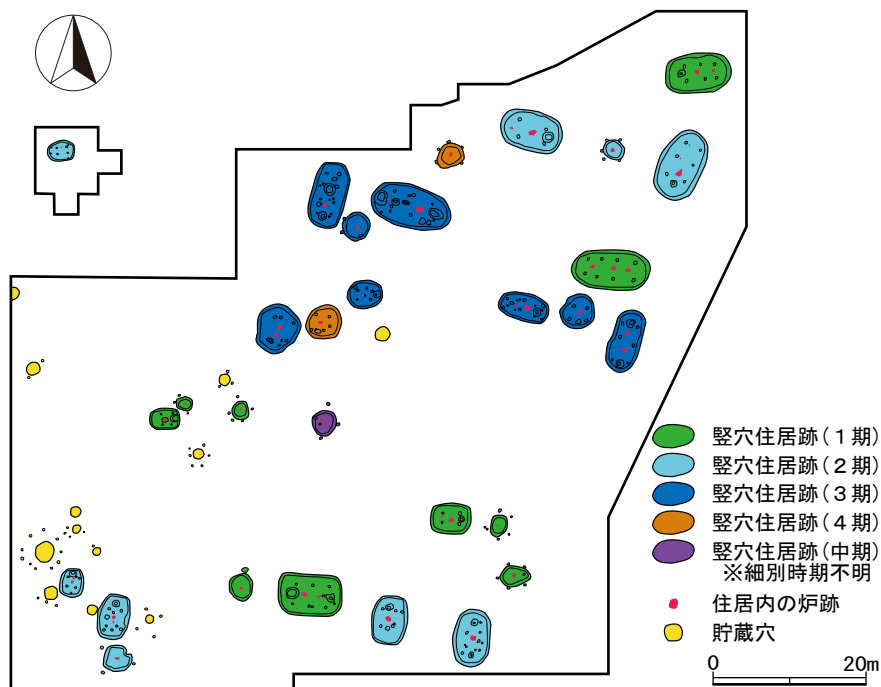
米代川流域では杉沢台遺跡や池内遺跡など前期後半に営まれた集落は、中期初頭に断絶する例が少なくありません。個々の集落の事情のほかに、気候悪化などの環境変化の影響もあったのでしょう。米代川流域では中期半ば以降に再び集落が目立つようになります。ここでは、日本海沿岸部に立地する能代市館下 I 遺跡の約5,000年前の中期中葉集落と約4,500年前の中期後葉集落、そして三種町古館堤頭 II 遺跡の約4,500年前の中期後葉集落を紹介します。

### 館下 I 遺跡の2時期の集落

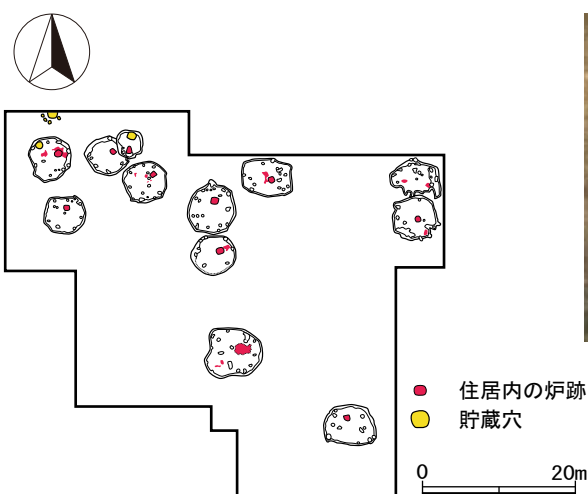
館下 I 遺跡は米代川右岸の標高約30mの台地上に立地します(8頁地図3)。昭和53年の発掘調査で、中期中葉と中期後葉の集落が約50m離れた場所に存在したことがわかりました。中期後葉集落では土器や住居の特徴が中期中葉集落から変化していますが、同じ人達が移動したのか、あるいは別の人が新たに移住してきたのかは特定できません。



▲中期中葉の竪穴住居跡。長さ約8m、幅約5mの楕円形平面をしています。規模は少し小さくなりますが、床には複数の炉があるなど、杉沢台遺跡の大型竪穴住居跡と似ています。



▲館下 I 遺跡の中期中葉集落の遺構配置図。大小の竪穴住居跡30軒のほか、貯蔵穴が見つかっています。中央に空き地があり、その北東側と南西側の2群に分かれる住居群があります。楕円形平面の住居に小型の円形平面の住居が附属することがあるようで、小型のものは子供の住居、あるいは一種の作業場だったかもしれません。住居の時期は出土土器や住居の向きなどから推測すると、大きくは1期～4期に分かれそうです。当初は北東側と南西側の住居群が併存していましたが、南西側の住居群は先に断絶してしまいます。貯蔵穴は個別の住居に伴うのではなく、共同で管理されていたようです。また、墓地は見つかっていません。



▲館下 I 遺跡の中期後葉集落の遺構配置図。竪穴住居跡は12軒見つかっています。貯蔵穴は3基しか見つかっていませんが、このうちの2基はそれぞれ住居内に付属しています。なお、この時期には遺跡によっては中央の広場の周りに住居が巡る「環状集落」と呼ばれる例もありますが、館下 I 集落では、住居が明確に環状に巡るとは言えません。関東・中部地方や東北地方中南部などの代表的な環状集落では、広場に共同の墓地が営まれますが、ここでは墓地もありません。



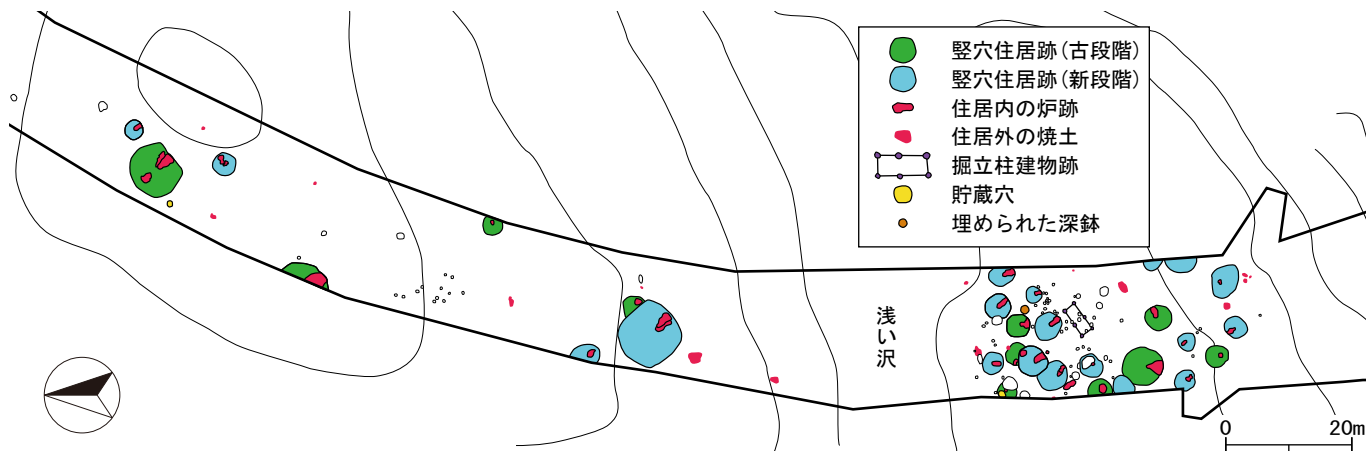
◀中期中葉の貯蔵穴。開口部直径約1.8m、深さ約1.6mで、底が広がっています。その形からフラスコ状土坑と呼ばれます。クリやドングリなどの食料を貯蔵したものです。



◀中期後葉の竪穴住居跡。直径約5mの円形平面をしています。奥の壁際に石囲いの炉が1基だけあります。東北地方南部の影響を受けた形式の住居です。

## 多数の住居が集中する古館堤頭Ⅱ遺跡の中期後葉集落

古館堤頭Ⅱ遺跡は旧八郎潟北東岸、標高20m前後の台地上に立地します(8頁地図4)。米代川からは南へ約15kmの位置にあります。平成12年の発掘調査で、浅い沢を挟んだ南北2か所で合計34軒もの中期後葉の竪穴住居跡が見つかりました。住居の炉や使われる土器は、それぞれ東北地方南部で盛んに作られた「複式炉」や「大木式土器」の影響を受けたものでした。遺跡全体の一部を調査しただけですが、確実な墓が見つからず、掘立柱建物や貯蔵穴のような他の施設も極めて少ないなど、住居中心に構成されることが特徴の集落です。



▲古館堤頭Ⅱ遺跡の遺構配置図。南側に26軒、北側に8軒の竪穴住居跡があります。南側では中央の狭い空き地の周りに中小の住居が巡る「環状集落」に見えます。ただし、住居は少なくとも新古の2段階に分かれ、古段階では空き地の西側に弧状に住居があったようで、環状ではありませんでした。また、墓地も見当たりません。そして北側には同時期の直径8m以上の大型住居と小型住居がおそらく組となって存在しています。集落は、性格が少し異なっていて必ずしも対等ではない2つから3つ程度のグループで営まれていたと言えそうです。集落は中期の終わりに廃絶されますが、その後に埋められた深鉢が1個見つかっています。集落に住んでいた人達が、別の場所へ移住した後に故地に作った記念施設のようなものだったのでしょうか。



▲直径約8mの大型竪穴住居跡。手前に埋めた土器や石を並べた囲いを組み合わせて作った複式炉が残っています。建て替えて大きくしています。



◀複式炉に埋められていた「大木式」系の土器。高さ38cm。



▲直径約9.5mの大型竪穴住居跡。右側は小型の竪穴住居跡と重複しています。手前側に複式炉があります。



▲大型竪穴住居跡から見つかった石棒。火を受けてバラバラになっていました。住居廃絶時のマツリに使われたようです。長さ39cm。

## 縄文中期集落の特徴

縄文時代中期は、関東・中部地方では最も遺跡数が増加し、墓地がある中央の広場の周りに住居が環状に巡る「環状集落」が地域の拠点となって一定間隔で分布することなどから、縄文時代の最盛期とも言われています。これに対し、東北地方北部、特に米代川流域では、必ずしも中期に遺跡数や住居数が極端に増加するわけではありません。さらに墓地の周りに住居が環状に巡る典型的な環状集落も認められません。古館堤頭Ⅱ遺跡の南側の住居群も環状に巡るよう見えますが、中央の空き地の縁に沿って住居が時期によって移動した結果とも考えられます。実は関東・中部地方では、「双分制」と呼ばれる、それぞれがある種の血統で結びついた対等の2つのグループの人達が1つにまとまって生活する社会が形成されており、環状集落はその2つのグループが共同で営む墓地を挟んで向かい合いそれぞれの住居を作って住んだ結果生み出されたという説が有力です。一方、沿岸部の米代川流域では、墓地が認められないことなども考えると、関東・中部地方で想定されるような「双分制」社会は形成されたとしてもそれほど安定して続かなかったようです。遺跡密度も相対的に低いことから、人口も関東・中部地方より少なく、おそらくより変動しやすい社会だったと言えるでしょう。



## ストーンサークルが出現する社会 ～縄文中期後葉から後期前半～

中期後葉には沿岸部の集落で紹介したように土器や住居などに東北地方南部からの影響が目立ってきます。そして、後期前半には大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡などで後期社会の大きな特徴の一つとなる、径30mを越えるようなストーンサークル(環状列石)が出現します。この時期は社会の大きな変革期と言えそうです。

### 小又川流域集落の変遷

ここでは、まず北秋田市(旧森吉町)の森吉山ダム建設に先立って発掘調査された、小又川流域の遺跡群から代表的な例を取り上げて、この時期の集落の変遷やその特徴を紹介します。

小又川は奥羽山脈奥部の源流から森吉山北麓を西流し米代川支流の阿仁川に合流する山間部の河川です。流域の遺跡は、小又川兩岸の平らな場所、標高110～200m前後の段丘上に立地しています。300万㎡を越えるダム湖予定地内には60か所の遺跡が確認され、平成7年から平成19年にかけて、合計52遺跡が発掘調査されました。そのうち、中期後葉から後期前半、約4,500年前から約4,000年前にかけての集落だったと考えられる遺跡は20以上ありましたが、中期の大規模な環状集落や後期前半の巨大なストーンサークルは確認されませんでした。



▲深渡遺跡の中期後葉竪穴住居跡。遺跡は小又川左岸にあり(8頁地図12)、住居は単独で営まれています。直径約4mで壁際に複式炉があります。住居廃絶時に壁沿いに石を環状に巡らして埋め戻し、小環状列石のような配石を作っています(表紙写真)。住居に住んでいた家族、おそらく1つの世帯のマツリの施設だったのでしょうか。



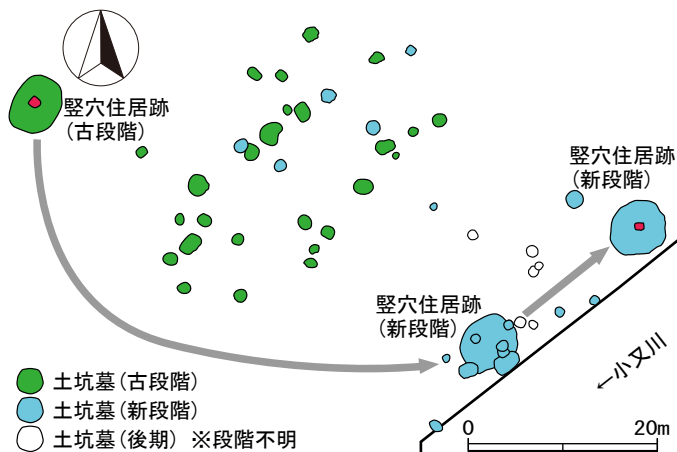
▲漆下遺跡のX字状の配石。深渡遺跡の竪穴住居跡の複式炉と壁沿いの配石を2つ組み合わせたような形をしています。複数の世帯が屋外に作ったマツリの施設だったかもしれません。



◀日廻岱B遺跡の後期初頭集落。小又川左岸に立地します(8頁地図10)。中央の空き地を挟んで向かい合った弧状に竪穴住居跡があります。少しびつな環状集落とも見えますが、墓は見つかりません。右奥には別系統の人達が住んだと考えられる竪穴住居跡があります。



◀漆下遺跡の中期後葉～後期前半の住居跡や配石。遺跡は小又川左岸に立地します(8頁地図11)。中期後葉の複式炉のある竪穴住居跡や後期初頭の住居跡が点在しています。いずれも明瞭な環状配置にはなりません。また、後期前半頃には石を並べたり組み合わせたりした配石や上面に配石がある土坑墓(墓穴)が作られます。配石には大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルを構成する組石と似たものもありますが、環状に巡ることはありません。全体の配置を事前に決めるような計画はなかったものと考えられます。



◀遺体を直接埋葬したと推定される土坑墓からは副葬された土器が見つかった例もあります。

◀森吉家ノ前A遺跡の後期前半の墓地。遺跡は小又川右岸にあります(8頁地図9)。墓の時期は大きくは新古2段階に分かれます。墓は北西側から南東側の順に作られたようで、結果として2群に分かれるような見かけになっています。墓地に隣接して1軒の竪穴住居が、墓が作られる場所が移動するのに対応し、西側から南東側、さらに東側へと順に建て替えられたようです。

## 伊勢堂岱遺跡のストーンサークルと大型不整形土坑墓

約4,000年前の後期前半に北日本に出現するストーンサークル(環状列石)には、詳しく見るとそれぞれ違いが認められます。いずれもが大きな労力をかけて運んだ大量の河原石を、直径が30mを越えるほどの巨大な環状に巡らせており、当時を代表する施設、一種の大規模記念物と言えるでしょう。ただし、米代川流域では、未完成と考えられる弧状のものを含めても中流左岸の北秋田市伊勢堂岱遺跡で4例、上流右岸の鹿角市大湯環状列石で2例、同左岸鹿角市高屋館跡で1例発見されているだけです。環状列石が見つかる遺跡は極めて限定されていて、数の上では環状列石を伴わない遺跡が過半を占めるのです。なお、この時期の大集落はこれまでに見つかっておらず、環状列石を作った人達がどこに住んでいたかが大きな問題となっています。ここでは、秋田県埋蔵文化財センターが平成7・8年に発掘調査を行った伊勢堂岱遺跡の環状列石Aと、昭和58年に発掘調査した同時期の能代市真壁地遺跡の大型不整形土坑墓も紹介します。



※北秋田市教育委員会2011年『北秋田市埋蔵文化財調査報告書第13集 史跡伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書』所収の図144を一部改変して作成

◀伊勢堂岱遺跡の遺構配置図(部分)。遺跡は米代川支流の小猿部川左岸、標高40~45m前後の台地上にあります(8頁地図5)。環状列石Aから環状列石Dまで4つの環状列石が見つかり、国の史跡となっています。秋田県埋蔵文化財センターが調査した環状列石Aは直径約30mで、北側にはまるでメロンのツルのように列石が張り出します。最初に中央部分に墓地とこれを挟んで2棟1組で東西の2群に分かれる掘立柱建物群が作られたようです。建物は住居もしくは埋葬に関わるマツリの施設とする考えがありますが、現時点では断定できません。その後、墓地とその周辺を平坦に造成し、環状列石を作ったと考えられます。



▲環状列石Aの様子。縦横に石を組み合わせた石垣のような組石になっています。環状列石は、このような組石がたくさん連なってできているようです。



▲大型不整形土坑墓。墓地にある墓と同種の墓です。少しずつ埋めたり、掘り返したりした跡があります。何人かの遺骨を繰り返し葬ったようです。家族だけでなく、より昔に亡くなった祖先も葬ったかもしれません。



▲真壁地遺跡の壺が副葬された大型不整形土坑墓。遺跡は米代川右岸、標高約20mの台地に立地し(8頁地図2)、大型不整形土坑墓がある後期前半の墓地が見つかりました。周囲に住居はなく、環状列石が巡る場所ありません。

## ストーンサークルが作られる遺跡、作られない遺跡

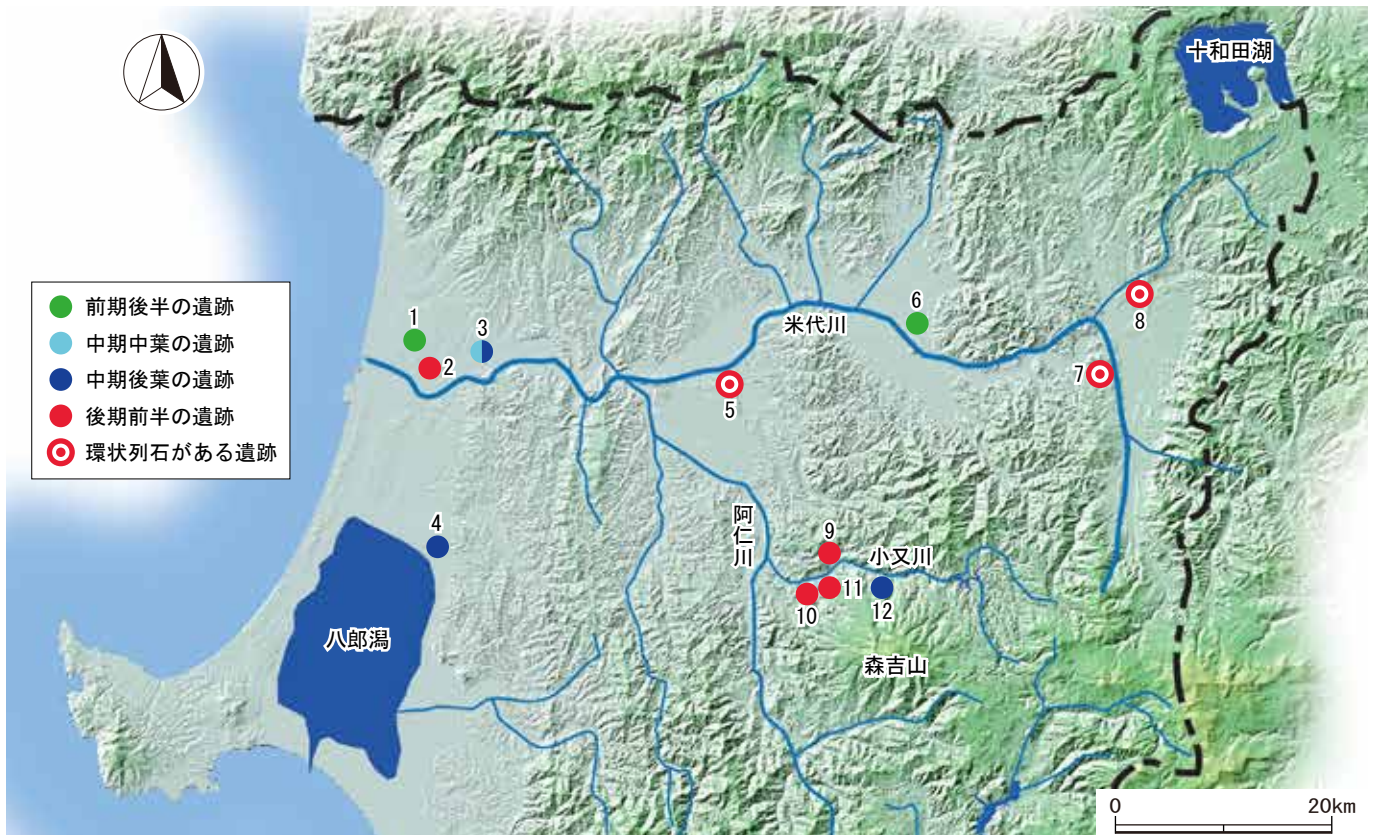
小又川流域では、配石は住居と関連したものから屋外で複数が集まるものに変化する様子が見られます。しかし、連なって環状となるようなものはありません。日廻窪B集落では住居群が2群に分かれそうですが、中央に共同墓地は存在しません。共同墓地の元でまとまって住むという意識はなかったようです。また、森吉家ノ前A遺跡の墓地は、真壁地遺跡の墓地と同様に単独の集団が営んだと考えられます。一方、伊勢堂岱遺跡の環状列石Aでは、まず多数の人が葬られた墓が集まる共同墓地が営まれ、ほぼ同時期に墓地を挟んで2群の建物が向き合うように作られたようです。その後、墓地を区画するように列石が環状に巡らされたと考えられます。墓地と建物の関係は環状集落の墓地と住居の関係と共通し、相対する2つのグループから構成される双分制社会との関わりが推測されます。血統が異なる別々のグループが同じ墓地を営み、そしてお互いが同族意識を持つための象徴として環状列石が協力して作られたと考えられるかもしれません。後期後半以降に環状列石がなくなるのは、このような双分制社会が変容したことが想像できそうです。



## おわりに

今回は、秋田県埋蔵文化財センター及び秋田県教育委員会が発掘調査した遺跡の中から、縄文時代前期後半から後期前半にかけての代表的な遺跡をいくつか紹介しました。これらの遺跡には、池内遺跡の大規模集落や伊勢堂岱遺跡の巨大なストーンサークルだけでなく、多様な特徴が認められます。それらの特徴は、それぞれの遺跡周辺の環境と生活の仕方、そこに住んだ人達の社会の仕組みやマツリのやり方などが複雑に関係して作り出されているようです。さらに、米代川流域だけでなく、より遠方からの情報の入手やモノの交換、あるいは人の移動など他地域との様々な次元の交流も大きく関わっていると予想されます。

今回の展示では、これらの特徴が生み出された経緯については、必ずしも具体的に示すことはできませんでした。今後、これまでの調査結果の再整理と検討をさらに進め、周辺地域の関連資料も収集した上で、機会を得て改めて米代川流域の縄文文化について御紹介できればと思います。



- 1 杉沢台遺跡 2 真壁地遺跡 3 館下Ⅰ遺跡 4 古館堤頭Ⅱ遺跡 5 伊勢堂岱遺跡 6 池内遺跡  
7 高屋館跡 8 大湯環状列石 9 森吉家ノ前A遺跡 10 日廻岱B遺跡 11 漆下遺跡 12 深渡遺跡

### 展示遺跡と関連遺跡の位置

○今回の展示及びパンフレット作成に際しては、北秋田市教育委員会から御援助・御協力をいただきました。

○展示及び本パンフレットの写真と図は、特記あるもの以外は秋田県教育委員会が撮影・委託もしくは作成したものです。

平成29年度 秋田県埋蔵文化財センター企画展第Ⅰ期パンフレット

## 米代川流域の縄文文化 ～縄文集落の変遷とストーンサークルの出現～

編集 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話：0187-69-3331 FAX：0187-69-3330

E-mail：maibun@pref.akita.lg.jp

ホームページ：http://www.pref.akita.jp/gakusyu/maibun\_hp/index2.htm

発行 平成29年6月